

松本健一著 『海岸線の歴史』 ミシマ社、二〇〇九年

齋藤 之 誉

一 問題の所在——海岸線の変化の意味を問う

本稿の目的は、地理学方法論への関心から、本書が「海岸線の歴史」にアプローチする方法に焦点化して考察を加えることにある。海岸線は、陸に住む人間と海洋が接触する場所である。海岸線を自然地理学の関心から観察しようとする者の眼には、そこは風・波・海流の物理的な侵食・運搬・堆積作用が海岸地形を形成する場所に見えるであろう。一方、人文地理学の関心から観察しようとする者にとって、海岸線は人間の活動の舞台であり、その利用価値と意味づけが時代・社会の状況と地域の事情によって異なる場所として認識されるであろう。

時代・社会の条件が変化すると、人間が海岸という場所に求める条件も変化する。このことによって、時代・社会ごとに海岸という「場所の使い分け」が起こるのである。本書が「海岸線の歴史」を読み解くために採用した方法の特色は、人間と海岸の関係性とその変化に、特定の時代・社会状況を反映する「時代相」を認めようとするところにある。このような本書の特色は、内容構成にも表れている。そこで、まず本書の目次を概観してみよう。

はじめに——海岸線は変わる

第一章 陸と海、神と人が接する渚——古代から現代まで

第二章 山中に海があった——古代を中心に

第三章 海岸線に変化はなかったが——中世のころから

## 第四章 白砂青松の登場——江戸時代

## 第五章 『海国兵談』とナショナルな危機意識

## 第六章 「開国」と海岸線の大いなる変化

## 第七章 砂浜が消失する時代

## 第八章 海へのアイデンティティ

終章 海岸線を取り戻す——ナショナル・アイデンティティの再構築を求めて

各章のタイトルに着目すると、海岸線の変化の態様に「時代相」を見出そうとする本書のねらいを確認することができる。地殻変動の激しい環太平洋造山帯に位置する日本では、地質学的な時間スケールで繰り返されてきた隆起・沈降の作用と、湿潤な気候環境のもとで進行した侵食・運搬・堆積作用によって、地域性のある多様な海岸地形が形成されてきた。このように多様な海岸地形の中から、時代・社会状況ごとに、異なる条件を備えた海岸地形が選ばれ、利用されてきたのである。

海岸線を舞台にした人間の活動は、地表面に景観として刻印される。そのような景観に関わる著者の原体験が、本書の成立に重要な役割を果たした。この点について、筆者は次のように書いている。「海岸線の風景がわたしたちの子どもころからわずか半世紀で、きわめて大きく変化しているというのに、その変化の意

味を考えてみようとする歴史書や思想書がないというのも、考えてみると日本人としては怠慢な話である。そこで、わたしがまず『海岸線の歴史』を書き、それがわれわれに日本民族にとって、ひいては人間の歴史に、そうして文明の未来にとってどういう意味をもつのかを、考えてみようとするのである」と。それでは、著者が本書の着想を得るうえで重要なきっかけとなったのは、どのような海岸線であったのであろうか。本書の「問い」の原風景について考察を進めてみよう。

## 二 「問い」の原風景——トロイア遺跡

著者は、「少年の日に夢見たトロイアにぜひ一度行ってみたい」という望みを、二〇〇七年五月に叶えることができた。トロイア遺跡を訪ねる以前の著者の主要な関心は、トロイアという古代都市国家の①場所、②規模、③構造、④何度つくり変えられたのか、⑤城壁は石積みか日干し煉瓦か、⑥人口、⑦都市劇場の収容人数、にあった。ここで興味深いのは、現地を歩いて観察する機会に恵まれた著者に、一つの変化が起きたことである。それは、「トロイアはいま、海(ダーダネルス海峡)からどれくらい隔たった場所に位置しているのか」という素朴な問いを発したことで

ある。

トルコ共和国西部のヒッサリクの丘にあるトロイア遺跡は、東西方向に約一〇メートル、南北方向に約一一五メートルの広がりをもつ遺跡である。これまでの調査によって、トロイアは紀元前三〇〇〇年から二五〇〇年頃の第一層から、西暦五〇〇年頃の第九層まで、時代の異なる九つの都市遺跡が地層を形成していることが明らかにされてきた。シュリーマンが発掘した第二層の時代に、トロイアはエーゲ海の港湾都市として繁栄を極めた。ところが、その後のトロイアは地中海沿岸のギリシャ・ローマ文明の多くの都市国家と同様に、衰滅の道をたどったのである。その過程について、これまでの研究が、次のような作業仮説を提案した。

地中海沿岸の地域では、ヘレニズム時代（紀元前三三三年から紀元前三〇年）以降に、森林が船と建築用材を生産するために大規模に伐採された。また森林を伐り開いた場所が、家畜の放牧地として極限まで利用された。植生を失った大地から表土が降雨によって流出し、河口に堆積して三角州の地形を発達させるとともに、沿岸の都市文明の経済的基盤であった港湾施設を埋積していた。このようにして港の機能<sup>2)</sup>が失われると、都市文明は衰退し、住民が去ると廃墟と化した。

人間は、地中海沿岸の地域で森林を大量に伐採し、家畜の過放牧によって大地を極限まで利用し尽くした。ところが、人間は植物の生産性に依存する生活様式から、逃れることはできなかったのである。従来の研究は、このような観点から、森林破壊と文明の盛衰の関係を実証的に考察してきた。その成果は、「森が語る人類史」<sup>3)</sup>の構想を描いてみせたことである。

「森が語る人類史」が着想された同じ地域を訪れた著者が、現代の海岸線から三キロ以上も内陸に隔てられたトロイアの景観を目の当たりにして、従来の研究とは異質な、「時代相」を切り口にする新たな視点から、「海岸線の歴史」を着想し得たところが興味深い。それでは次に、海岸線の景観変化を手がかりにして、その歴史的な意味を問おうとする、本書のユニークな方法論の特色について考察を進める。

### 三 「海岸線の歴史」の方法論——「地位層」の再発見

ここで、海岸線の景観変化の意味づけについて論じようとする本書の方法論を、地理学方法論への関心から考察することには、一つの根拠がある。それは、人間の活動と海岸線との関係の歴史の中に「時代相」を見出そうとする本書のアプローチが、田中啓

爾（一八八五―一九七五）によって一九五一（昭和二六）年に提唱された「地位層」の考え方と相似点をもっているからである。

田中は、研究対象地域の特色ある事象を記述する博物学のような状態にあった日本の地理学を、地誌学を中心にした独立科学として確立した人物である。<sup>(4)</sup> 地理学が追究する研究対象地域の「地域性」とは、空間的なまとまりをもって地域社会を形成している地域の総合的な性格のことである。この地域性が時代とともに変化すると仮定すれば、ある地域の特色は各時代ごとの地域性の積み重なりが、現代の地域性の形成に繋がると考えることができる。このとき各時代の地域社会は、各々の時代の特徴を反映した時代層を形成しているとみなすことができる。この時代層のことを田中は、「地位層」と呼んだ。<sup>(5)</sup>

各地域をつぶさに観察すると、江戸時代の街並みを残している「江戸時代の地位層」や「昭和戦前期の地位層」、「昭和五〇年代の地位層」など、指標の選び方によって多様な地位層を発見することができる。地位層の考え方は、ある土地の地域性が絶えず成長・発展する現象と、地質学が分析の対象とする地層を同定しようとする類推及びアナロジー (analogy) の思考から組み立てられたものである。

そこでは、一見しただけでは何の関係もなさそうに見える二つ

の事象の間に、互いによく似たところがあることを洞察する、いわば「同定の原理」が重要な役割を果たしている。田中は一九五八（昭和三三）年に、地位層の考え方をを用いて、東京都江東区と神奈川県川崎市の都市化現象を考察した。このときに、都心から郊外に向かって市街地が連続的に拡大していく都市化現象のプロセスとメカニズムを説明するために、「文化扇状地」というモデルを提案した。その成果は、田中啓爾著『地理的総合研究―川崎市と江東区』（古今書院<sup>(6)</sup>）にまとめられた。

地理学研究の場から発想された「地位層」論をふまえるとき、各地の海岸線の景観変化を分析して、その態様に各時代を特徴づける時代相を認めようとする本書のアプローチは、田中とまったく異なる文脈から地位層と相似の考え方に到達するとともに、この考え方を景観変化の分析と意味づけに敷衍したところが重要である。

このことを地理学研究の文脈から捉えるとき、本書の方法は地位層の再発見だといえよう。それでは次に、各地の海岸線の景観変化にみられる各時代の地位層を概観してみよう。

#### 四 「海岸線の変化」における各時代の地位層

ここでは紙幅の制約から、「古代」と、江戸時代における「開国」期の地位層に限定して、その特色について考察を進めることにする。

##### 1 「古代」の地位層

本書では、第一章の第一節と第二章が古代の地位層の考察にあてられている。古代の地位層に関する記述のなかで、「海岸は陸と海が接触する場であると同時に、神と人間が接触する場でもあり、また生者と死者がそこで接触し、そしてまた相別れていく場所である」という見解に注目したい。加えて筆者は、古代における海岸という場所の特性について、次のように説明している。「日本中にひろがっている生者と死者の接する場は、ほとんどが海辺であるといっている。あるいは、海（水）の見える山や丘の上である。（中略）だから、海辺は神聖な場所であり、神に祈る場所でもある。そこに、わが民族はまず最初の神殿を建ててきた」のである。

この指摘は、中沢新一著『アースダイバー』の指摘と符合している。ここでは、縄文海進期の地図を持って東京の街を散策する

醍醐味が説かれている。地質学と考古学の研究によって、縄文海進期の頃の東京の地形環境の状態が解明されてきた。坂道が多く起伏に富む東京では、都市景観が卓越する現代の地位層の合間に見え隠りする、縄文海進期の地位層の散策を楽しむことができるのである。

東京の地形環境は、縄文海進期に陸化していた洪積台地と、海水が侵入して海底であった沖積低地（谷地・谷津）から構成されている。洪積台地は、縄文海進期の頃には、海に突き出た岬となっていたのである。現代の地形図を手がかりにして、洪積台地と沖積低地の分布状態を観察してみると、縄文海進期にどこまで海が侵入していたのかを推定することができる。

想像力を働かせてみると、東京の縄文海進期における海岸線には、フィヨルドのように複雑な景観が卓越していたと考えられる。頭の中で構成した景観のイメージを、現代の地形図に重ね合わせて東京の街を散策してみると、見慣れたはずの景観が一変するよう感じられるであろう。

まず縄文海進期の原図を利用して、往時の海岸線の位置を現代の地形図で確認してみよう。次に、縄文・弥生遺跡、古い神社、古墳、寺院、墓地の分布状態を確認してみる。この二つの分布状態を重ね合わせてみると、日本人が古代から埋葬地や聖地にして

きた場所は、いずれも縄文海進期に海に突き出していた岬状の地形と一致していることに気がつく。日本人は、縄文時代から古墳時代にかけて埋葬地や聖地に選んできた往時の岬地形の突端部に、後世の江戸や東京のランドマークとなる重要な施設を、繰り返し時代を超えて競うように建造してきたことが明らかになる。

複雑で混沌とした東京の景観の中に、岬地形に霊的な力を察知してきた縄文人の思考が、無意識のうちに繰り返して再現されてきたことに、現代の日本人は気づいていないのである。

この意味において、本書で提起された古代の地位層に関する論点は、縄文人以来の日本人の心性の一端を説明しようとするものであるといえよう。

## 2 「開国」期の地位層

本書の「開国」期の地位層の考察は、広島県福山市にある鞆の浦港の事例を敷衍して展開されている。瀬戸内海に面する鞆の浦は、古代から江戸時代にかけて、海上交通の要所に位置しており、潮待ち港や風待ち港として重要な役割を果たしてきた。

鞆の浦は、①水深が浅く、②円形の小さな入り江を形成していた。このような港の地形環境が、潮待ちや風待ちを必要とする船と

航海術を活用していた海上交通の発達段階では求められていたものである。ところが江戸時代の開国期を迎えると、ペリー艦隊のように、排水量が二〇〇〇トンを超え、喫水線の深い外洋船を入港させることが可能な地形環境が港に求められるようになった。

筆者の指摘によれば、「江戸時代にあつては、北前船のなかでも一番大きな高田屋嘉兵衛の船などは千七百石の辰吉丸しんきつまるの建造が許されていたが、それでもヨーロッパの洋トン数に直せば一七〇トンほどで、ペリー艦隊の最大の艦船、二四五〇トンと比べれば排水量は一〇分の一以下<sup>10)</sup>であつたのである。

大型の外洋船が寄港できる港に求められた条件は、①水深があり、②海岸沿いに平地が少ない場所であつた。このような海上交通の変革が開国期に生じたために、遠浅の地形環境の良港として繁栄を極めた港が、近代的な港としては役に立たなくなった。

このことは、時代・社会の条件が変化すると、人間が海岸という場所に求める条件も変化することを如実に示した事例であるといえよう。

開国期の地位層として着目された、港の劇的な交替と変遷について、筆者は「海岸線の意味のもつ歴史的な変化に影響を及ぼしている」ことを指摘した。このことは、人間の活動の主体性を積極的に評価する立場にたつとき、海岸という場所の意味づけと評

価、さらに利用価値が、時代・社会の条件が変化すると、ともに変化することを示すものである。

### 五 おわりに——「海岸線の歴史」の教育的価値

物理学の研究者であった寺田寅彦は、多くの随筆を残したことも知られている。寺田は、一九二二（大正一一）年に発表した随筆「茶わんの湯」において、茶わんから立ち昇る湯気と、器の中の湯のふるまいをつぶさに観察して、そこから熱雷や海陸風、さらに季節風などの大気の物理現象に通じるダイナミックな原理を洞察した。<sup>①</sup> 随筆「茶わんの湯」は、科学研究を楽しむ精神と視点を子どもたちに涵養するために書かれたものであった。

そこには、「平凡の中の非凡」に着眼し、素朴な発見の喜びと感動体験が教育の営みにとって、いかに重要であるかを示唆する意図がある。本書を一貫する地位層の見方・考え方は、読者が現実の社会で生起する社会的現象の地域性と時代性を考察するうえで、重要な手がかりになるとともに、生きて働く思考の道具になるはずである。この意味において、歴史学や地理学に関心のある初学者が読まれることを期待する。

### 注

- (1) 松本健一（二〇〇九）『海岸線の歴史』、ミシマ社、一九頁。
- (2) 安田喜憲（一九八九）『文明は緑を食べる』、読売新聞社、五五—六三頁。
- (3) 前掲書（2）、二八頁。
- (4) 大槻徳治（一九九二）『志賀重昂と田中啓爾—日本地理学の先達—』、西田書店、一一三—一四頁。
- (5) 田中啓爾（一九六五）『第三地理学論文集』、日本書院。
- (6) 田中啓爾（一九五八）『地理的総合研究—川崎市と江東区—』、古今書院。
- (7) 前掲書（1）、二八頁。
- (8) 前掲書（1）、二九頁。
- (9) 中沢新一（二〇〇五）『アースダイバー』、講談社。
- (10) 前掲書（1）、一八六頁。
- (11) 随筆「茶碗の湯」は、寺田寅彦（一九九二）『寺田寅彦全随筆 二』、岩波書店、二二—三三八頁に所収されている。